
紅の夕日坂

尾ノ坂 駿介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の夕日坂

【Nコード】

N4876I

【作者名】

尾ノ坂 駿介

【あらすじ】

あれから数ヶ月経った秋。相変わらずの関係だった楓と翔太に、少しだけ進展が……。

(前書き)

この作品は短編「夏色の空模様」の続編です。
全四部構成です。何故短編なのかというと作者がミスをしたせいです。ごめんなさい。

「……ほ、ほら、翔太。あーん。あーんだぞ」

十月。太陽が次第に降下し宵闇の空へと変わりつつあった午後の教室。誰もいない教室の電気は既に消えている代わりに、カーテンの隙間から差し込む太陽の光が二つの影を映し出していた。夏よりも平均して気温が低い秋の空気は何処か肌寒さを感じさせ、半袖でいるのが主だった翔太の格好も、いつしか合服へと変わっていた。

そして翔太の目の前にいる――弁当箱からおかずを一つ箸で摘んで、彼の口元にそれを運ぼうとする彼女――楓もまた、首元に赤のリボンをつけた合服を着て、緩やかな表情で翔太を見詰めていた。おそらく、弁当は自家製だろう。自分で作ったのか知らないが、手には絆創膏が何枚も貼られてあった。

ショートボブだった髪はウェーブがかかった長髪に変わり、さらさらの髪は腰辺りまで伸び、新しく出来たトレードマークのような癖毛は、尖った刃物のように思い切り真横にはねている。彼女の透き通った瞳も相変わらずだが、今はやや緊張の色が隠せていないようだった。

そんな気恥ずかしそうに顔を赤らめる楓をそっちのけて、翔太は机に肘をつき、ぶっきらぼうな様子で彼女に訊いた。

「なあ」

「ん、どうした」

「……今、何時だ？」

「今か。今は……午後四時だが」

「そうか。……なんで今、弁当なんだ？」

「……し、仕方が無いだろう。せっかく弁当を作ってきたのに、翔太が弁当を持ってくるのが悪いんだ」

「そういう事は早めに言ってくれよ。メールや電話でも良かったじゃないか」

「それじゃ意味がないではないか！ お、驚かせようと思って作ったんだから……」

「お前なあ……」

プレゼントを渡すのとはわけが違うんだぞ、と言い、翔太は彼女の額に軽くデコピンを食らわせた。

楓は「あうっ」と子供のような短い悲鳴をあげて、大げさに頭を後ろに仰け反らせた。若干涙目になって楓は翔太を見詰める。

「うう、それじゃ食べてくれないのか……？」

自分の額を押さえて、落胆したような暗い声色で言う。翔太はそんな彼女の様子を見て一つため息を漏らすと、彼女の持っていた箸を取り上げ、弁当のおかずだった玉子の厚焼きの一つ摘み、口の中へ放り込んだ。柔らかく、それでいて甘いものが口の中を即座に広がり、翔太は感慨深げに呟いた。

「……美味しいな。いい感じに仕上がってる」

その一言を聞いて、ブルーだった楓の顔が一気に輝きを取り戻した。俯きがちだった視線はまっすぐに翔太に向き、その言葉を何度も自分の頭の中で繰り返しているような――そんな様子だった。

「ほ、本当か？」

「ああ、美味しいよ。楓って料理上手なんだな」

「そ、そうだろう！ 昨日は厨房でレシピを見て頑張ったんだからな！ ほら、こっちのハンバーグとかはどうだ？ 翔太はハンバーグが好きだろう？」

「ああ、貰うよ。……ってお前、何で俺の好物を知っている？」

「ふふふ。私が翔太の好みを知らないと思ったか。それに、好物だけじゃない。ちゃんとお前の情報は把握済みなのだからな」

ぞくり。

両肘を突き、手の甲で顎を支えながら微笑む楓を見て、翔太は背筋に悪寒が走るのを感じた。

顔つきは綺麗に整い、平均よりグラマラスな肢体を持つ姿から、楓は世間一般に見ても美少女と言うのが正しいのだが、翔太だけはその美少女の頭に小悪魔の角が生えていることがはっきりと分かる。天使のように微笑む姿も、何処か後ろめたい雰囲気放っていることも薄々感じ取ることが出来た。

これだから金持ちは怖い。そんな考えに浸りつつ翔太は、彼女の弁当からハンバーグを一つ箸で摘み、口の中へ放り込んだ。

少々冷めてはいるものの、やはり美味しい。真心を込めて作ったと言うのは、こういうことを差すのだろうか。と、少しだけ幸福な気分が変わりつつあった翔太だったが、目前に座っていた楓が何かに気がついたようににもじもじと自分を見詰めているのに気がついて、首をかしげた。

「どうした？」

「あー、翔太。あの……うん」

「何？」

「その箸、私ので……その、それって……間接キス、だな」

「……あっ」

そう言われて翔太は気がついた。勝手に箸を借りて、勝手に使っていたのだ。

突然の彼女の一言に、一気に恥ずかしさが込み上げてくる。楓も頬を指でぽりぽりと掻き、頬を紅潮させているのが直ぐに分かった。

「ごっ、ごめん。俺、勝手に……」

「い、いや、全然いいんだ。私は気にしてないし、翔太も気にすることじゃない。そ、それに悪い気分でもないしな……」

悪い気分ではない、というのはどういう意味だろうか。ふと翔太はそれを楓に訊こうとしたが、特にこれといって大した疑問でもなかったため、直ぐに口を閉じた。

「また洗って返すよ。ごめんな」

「別に謝らなくていいぞ。……ふふ。間接キス、か……」

少しだけ嬉しそうに呟く様子の楓を見て、翔太は再び首をかしげた。人に箸を使われてそんなに嬉しいものなのだろうか、と一瞬思ったが、このお嬢様は少々抜けているところもあるからな、と勝手に自己解決した後、翔太は弁当と箸を綺麗にしまって立ち上がった。

「楓、そろそろ帰ろう。もう日も暮れてきたし、暗くなると何かと物騒だからな」

「あ……うむ！ で、その弁当は……」

「家に帰ってゆっくり食べさせてもらうよ。明日綺麗にして返すから」

「そ、そうか。それじゃあ、帰ろう。……危険な奴に出会ったら、ちゃんと翔太は私を守ってくれるか？」

「……さあな。お前一人置いて帰っちゃうかも」

「なっ——！」

鬼だの悪魔だの罵られ小突かれながら、翔太は楓と一緒に教室を出た。

外はもう、うつすらと暗くなりつつあった。

◇

電車が通る踏み切りの前。翔太と楓は学校の鞆を肩に掛け、二人のんびりと佇んでいた。

秋風によって長くなった楓の髪がふわりと靡いている。あの時も――そう、あの蒸し暑かった夏の日。二人、屋上で話をした時もこんな感じに揺らいでいた。

「なあ、どうして髪を長くしたんだ？」

「ん、ああ。特にこれといって理由は無いが、今時の言葉で言うなら『イメチェン』と言うのが正しいのだろう。……私の髪、変か？」

「いや、全然変じゃないよ。ただ、前より大人っぽくなったな、と思ってるさ」

「わ、私はいつでも大人っぽいぞ！……まあ、こっちの方が翔太に気に入ってもらえるかなと思ってな。以前の髪と今の髪、どっちが似合っていると思う？」

楓は翔太の方へ身体の向きを変え、髪を整えて訊いた。翔太はあまり考えようとはせず、率直に、こう答えた。

「うーん。今、かな。まあ、俺はどっちも可愛いとは思ってたんだがな」

「……い、今、何て？」

「え？」

「もう一度、今の言葉を言ってくれないか？　今、翔太は私に何て言っただ？」

ずいっと楓の顔が翔太の目前まで迫る。湧き上がる感情を押し殺したような彼女の様子に若干後ずさりしながら、翔太は言葉が続けた。

「あ、ああ。お前はどっちの髪型でも可愛いつて言ったんだ。……俺、何か変なことを言ったか？」

そう訊くと、楓が激しく首を横に振った。

「とんでもない！」と手に持っていた鞆と一緒に振り回しながら、少しの間黙考したような素振りを見せ、恐る恐る彼に聞いた。

「そ、その言葉、お世辞や嘘の類じゃないのだろうか。そうだとしたら私は酷く悲しいぞ？」

「嘘じゃないしお世辞でもないよ。俺はそういう嘘は嫌いだし、悲しませるようなことなんて言わないしさ」

それだけ聞いて、楓は心から安心しきったような、落ち着いた表情になった。「良かった」と口々に呟くと、満面の笑みで遠目に映る夕日を眺めだした。

頬も夕日に照らされてなのかは知らないが、若干赤みを帯びていたのが良く分かった。

一喜一憂が激しいとは前から常々思っていたのだが、多分それは自分が彼女を惑わせてしまっているせいなのだろうと翔太は考えた。そう、自分という存在が、楓という存在に光を与え、時には闇も与えてしまっているということを。

楓は翔太の一言で笑ったり、泣いたり、怒ったりするのが多い。それは何より翔太が好きだからという一点があるからの話で、それ以外は頷くことが出来ない。

しかしその分、翔太には未だ葛藤があった。どうして、彼女は自分

を此処まで慕っているのかということと、自分は、本当に彼女と釣り合うべき存在なのであろうか、と。

「なあ、楓」

「ん、どうした翔太？ 私に何かついてるか？」

服の袖や首筋を執拗に見回して翔太の顔を見る楓。

そんな楓に向け、翔太はただ、簡潔に、きっぱり言い放った。

「どうして、俺を好きになったんだ？」

その言葉を聞いて、楓は頭にクエスチョンマークを一つ浮かべた。質問の意図が分からないとでも言うような表情で。

「翔太は変な奴だな。お前が好きな理由くらい、お前自身が知っていることだろう。あの時――初めて翔太に告白をした時に、その本意を示したはずだ」

「そうじゃなくてさ。根本的な理由を聞かせて欲しいんだ。あの時、お前は言ったよな。俺の慰めた言葉がきっかけで好きになったってつまり、それは俺じゃなくても良かったんじゃないのか？ いわゆる一目ぼれってヤツなだけで、俺の全てを見て好きになったわけじゃないんだろう。もし俺が善人ぶった奴で、良いようにお前を……その、金持ちだから仲良くしたいだとかそんなことを思って慰めていた場合は、どうするつもりだったんだ？」

もう一つ、いや二つ、彼女の頭にクエスチョンマークが加わる。難しい顔をして翔太の言葉の意味を考えている。そんな様子が良く分かった。

やがて首をかしげながら、楓は自分の整理した考えを翔太に述べた。

「翔太の言っていることがさっぱり理解できないな。どうしてそういう結論になる？ それに、どうするもこうするも……もし翔太がそんな奴だったのなら、私はそこで諦めるだけだ。一年間、私は無駄な時間を過ごしてしまったなと落胆せざるをえないだろう。……でも、翔太はそんな奴じゃなかった。金持ち云々とか、そんなものは関係無しに、こんな私でも、お前はそばにいてくれた」

「でも、俺はお前をあんな――」

「翔太、最後まで喋らせてくれ。……確かに、最初はお前の言ったとおり、一目ぼれだったのかもしれない。けど、一年間、私はお前のことを見続け、お前だけを慕っていた。何と言うか……その感情はいつしか言葉に言い表せないくらいに肥大していて、いつの間にか、私は翔太しか見れなくなっていたんだ。告白をした後も、何気なく言葉を交わしてくれる翔太が、こうやって、一緒に私と帰ってくれている翔太が、私は……たまらなく愛しいんだ」

「……………」

「私はな、誰かを好きになることに、そんな小難しい理屈や理由はいらないと思うんだ。何かのきっかけで、私のように恋をすることもある。今回は翔太だったからとか、そんなのじゃなくて、な。あの時は確かに翔太の言葉を鵜呑みにして、勝手な思いやりをしていたのかもしれない。でも、でも今は違う。こうやって、自分の知らなかった翔太を知ることが出来た。……今思えば、翔太があの言葉をかけてくれた時から、私という物語は始まっていたのかもしれない。翔太という主人公が、私という……その、ヒロインというよきな立場は翔太にとって少々気に食わないかもしれないが、それで

も……うん。始まったんだ。私の恋物語を、翔太が始めてくれたんだ」

「楓……」

ひとしきり喋り終えた後で、楓はにこりと笑顔を翔太に向けた。それは本当に、無邪気で、可憐な笑顔を。

これが本当に偽りを語るような顔だろうか。いや、そんなことは断じてない。素直に、本当に素直に、翔太はそう感じた。

本当に彼女を好きになってもいいのだろうか。自分はただ、からかわれているだけではないのだろうか。

『友達』として彼女を認識して数ヶ月。

少しずつそのような感情が生まれつつあった翔太は、楓のことを未だに理解できていなかった。

度重なる彼女からのアプローチも、それが本当に彼女の真意かどうか定かではなくて、いつも流すような態度を見せていた。

もしも自分に対する思いが嘘であったなら、自分はどうすればいいのだろう。楓に対する思いが無駄だと知ったとき……自分はどんな気持ちになるのだろう、と。

自分に対する卑下と、彼女に裏切られるという恐怖が、自らの首を締め付けていたのだ。

だから、翔太は一番気になっていた疑問を楓にぶつけた。そして返ってきた答えは、彼女らしい返事だった。好きになることに理由なんていらぬ。ただそれだけという形で。

「それに、な。翔太に告白してから、私はクラスに馴染めるように一生懸命頑張ったんだ。……まあ、そんなことを自分で言うのも、いささか無遠慮な感じがするのだが……それでも、隔たり無く、みんなと楽しく過ごしていきたくったから」

そう。あれから彼女は、友達が増えるように色々と努力した。不器用ながら、誰かと気兼ねなく接することを、翔太という存在を経て改めて認識することが出来ていた。

命令口調が入った喋り方は少々いただけなもの、自分から進んで他人の為に動こうという努力は、彼女にとって大きな進歩であったし、成長でもあった。

あの頃――この学校で初めて出会ったときの、周囲の視線に怯え、自分という殻の中に閉じこもっていた楓はもういない。今では、楓も立派なクラスの一員としてやっていっている。

クラスメイトと楽しそうに笑う楓は、本当に以前とは比べ物にならないくらい光輝に満ちていた。明るく真面目な、クラスのまとめ役のような存在になっていた。

「……そんな私の感情を作ったのも――翔太、お前だ。以前は誰とも喋りたくはなかったけど、今は違う。こんなにも会話が楽しい。こんなにも人と接することが楽しいって思えてきたんだ。……本当に、翔太には心から感謝をしているんだ」

鞆を置いて、そっと翔太の手を握る。温かい。肌寒くなりつつある秋の気温を感じさせないほど、彼女の手は温かさに包まれていた。翔太は、その彼女の温かさに触れながら、一言、本当に独り言のようには呟いた。

「――やっと、素直になれるよ」

「――え？」

楓がそれ以上口を開く前に、翔太は――。

◇

電車が喧しい音を上げながらレールを通過し終えたのと同時に、翔太は彼女の唇から自分のそれを離れた。

見ると真っ赤な顔で唇を押さえている楓の顔が即座に翔太の目に入った。まるで、爆発寸前の爆弾のように。

「しょ、しょうた……い、いたい、にゃ、にゃにを……!？」

唇を押さえながら喋っているのも、ほとんどろれつが回っていないかった。

そんな様子に翔太は軽く噴出して、彼女の頭を優しく撫でた。

ぼふん、と音を上げて楓の頭から煙が出ている……ような錯覚を一瞬だけ見た気がする。翔太は彼女の長い髪を丹念に撫でていった。

身体を預けて、自分の顔を翔太の胸に埋める様子は、まるで仔猫が親猫に甘えているような姿だった。

「そんなことより、さ。早く帰ろう。もうじき暗くなるからな」

「う、うう……話をはぐらかすなあ……」

涙目で見詰める楓の背中を優しく押し、翔太は楓と一緒に、長かった踏切を越えた。

踏切を越えた二人の目の前には、長い坂が見える。

降下していく太陽に照らされて、橙色に染まった夕日の坂が。

この向こうに楓の家が。更に距離を置いたところに翔太の家がある。手をつないで、二人は坂を駆け上がった。

「――あの、翔太! さっきのは、もしかして……」

「楓、後で伝えたいことがあるんだけど、いいか？　もう少し言葉を整理して伝えたいんだ」

「あ……うむ！　最高の答えを、期待して待っているぞ！　私を満足させられる言葉じゃないと駄目だからな！」

「……ああ！」

この坂を上れば、見えてくる。始まったばかりの二人の物語が。告白を告げ、友達から恋人へと変わりつつあった心境。

翔太にもう迷いは無く、決心していた。楓とちゃんと向き合うことに。

夕暮れに染まる夕日坂。二人を追うように、その影はどんどん上へと上っていく。

お互いを信じあえた二人の距離は、いつになく縮まっていた。

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4876i/>

紅の夕日坂

2010年10月9日01時25分発行